

2023年2月

企画展

FROM OSAKA

～百貨店美術部モノガタリ～

- 会期 : 2023年3月4日(土)→7月3日(月)
- 会場 : 高島屋史料館 企画展示室 (大阪市浪速区日本橋3-5-25 高島屋東別館3階)
- 開館時間: 午前10時～午後5時 (入館は閉館30分前まで)
- 休館日 : 火・水曜日 ※5月11日(木)→5月19日(金)は展示替えのため休館いたします。
- 入館料 : 無料

高島屋史料館では、2023年3月4日(土)から7月3日(月)まで、
特別展示「FROM OSAKA ～百貨店美術部モノガタリ～」を開催いたします。

現在、日本の多くの百貨店には美術画廊があります。そこでは、週替わりで美術品の展覧会が開催されていて、展示作品を気に入れば誰でも購入することができます。“買える美術館”といわれる所以です。担当するのは百貨店の美術部門。その歴史は、1907(明治40)年、三越呉服店が大阪店に「新美術部」を創設したことにはじまります。続いて1911(同44)年、高島屋呉服店が大阪店に「美術部」を創設しました。その後、同業他店でも美術展が開かれるようになり、美術部が創設されましたが、「百貨店美術部の両雄」として知られたのは三越と高島屋の両美術部でした。

本展では、ともに大阪の地から誕生した三越と高島屋の美術部の成り立ちと活動をひも解きながら、「大阪」をキーワードに集めた作品を展観します。近代日本において百貨店美術部が果たしてきた役割を見つめ直し、その現在、未来についても考えます。



※本展は会期をⅠ部・Ⅱ部に分け、展示作品をすべて入れ替えて構成します(一部、展示資料を除く)。

【展示内容】

第1章 美術部の創設

百貨店は“百貨”を扱うお店です。「デパートメントストア宣言」を発表し、本格的百貨店をめざして商品を増やしていた三越呉服店は、1907（明治40）年、大阪支店に「新美術部」を創設し美術品の販売を開始しました。続いて1911（同44）年、先に美術展を成功させていた高島屋呉服店が、お客様からのお声に応える形で、大阪店に「美術部」を創設。のちに“両雄”といわれる三越と高島屋の美術部は、ともに大阪の地からスタートしました。



富岡鉄斎が揮毫した「高島屋美術部」1919（大正8）年：I・II部



現在の大阪店美術画廊扁額 1957（昭和32）年



島成園《お客様》 制作年未詳 絹本着彩：I部



菅橋彦《鯛あみ》 制作年未詳 紙本着彩：I部

北野恒富

《婦人図》

1929（昭和8）年

絹本着彩：II部



森村泰昌

《北野恒富・考/考》

2011（平成24）年

写真：II部



第2章 美術品の展覧会

現在、日本国内には5,000を超える博物館・美術館があります。しかし、戦前までの日本には、博物館・美術館は数えるほどしかなく、美術展の多くは百貨店で開催されていました。百貨店は誰でも訪れることができ、無料で気軽に展覧会を観ることができる場所。人々は百貨店で美術品を愛する心や、作品の鑑賞眼を養っていきました。一方で、知られざる作家を見出し、個展開催に結びつける — 美術展の開催は芸術家を支援することでもありました。



鍋井克之《熊野詣》 1962（昭和37）年 カンヴァス・油彩：I部

かつて、国鉄天王寺駅（大阪・天王寺区）コンコースには綴織壁画が設置されていました。壁画は、近畿日本鉄道・野村証券・高島屋の3社がスポンサーとなり、鍋井克之が制作した120号12面の原画をもとに綴織で製作されました。展示作品はその中央部4面（高島屋のスポンサー部分、各194.3×125.7cm）の原画。右から「道成寺」「白浜温泉」「串本・橋杭岩」「湯川温泉」が描かれています。



国鉄天王寺駅コンコース

◆再興日本美術院の会場となった三越と高島屋

日本美術院は、1898（明治31）年、東京美術学校を辞職した岡倉天心を中心に、同じく同校を辞職した橋本雅邦、横山大観、菱田春草、下村観山ら26名によって、在野の美術団体として結成されました。同年10月に第1回展を開催。その後、経営難となり、1906（同39）年に茨城県の五浦に研究所を移し、対外的な活動をほぼ休止しました。ところが、1913（大正2）年に天心が死去。その死は大観らを奮起させ、翌年に大観、観山が中心となって再興日本美術院を結成。再興院展は文展と同会期で開催、その会場となったのは、三越呉服店の旧館でした。東京に続いて大阪の会場となったのは、高島屋大阪心齋橋店でした。これが院展の関西進出の第一歩となり、関西の画壇に大きな影響を与えました。

◆「創立50周年 第32回再興院展」の開催

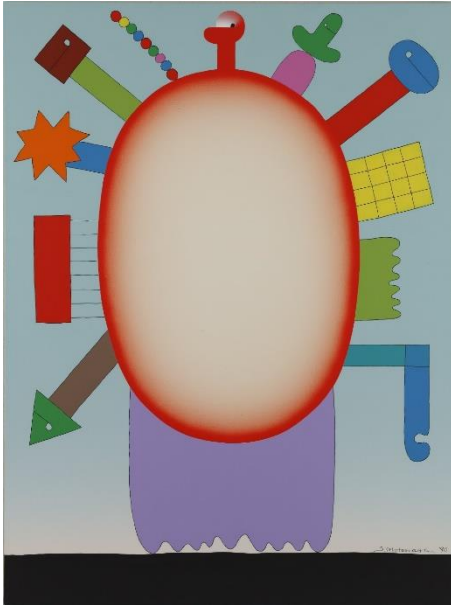
1947（昭和22）年秋、「創立50周年 第32回再興院展」の大阪での開催は、高島屋大阪店の地下食堂（戦災により焼失）跡が会場となりました。黒く焼けた天井には鉄筋が下がり、床は土間で荒れたままの状態であったといいます。国中が疲弊し、人心も未だ落ち着かなかった時代、横山大観らとともに高島屋は美術の復興を目指しました。



鉄筋が下がる院展会場（高島屋大阪店）

第3章 アートのチカラ

美術—アート—には人間の心を動かすチカラがあります。週替わりで個展やグループ展が開催されている百貨店の美術画廊。展示作品を気に入れば、誰でも購入することができ、自宅に飾ることができます。作家と直接話す機会もあります。美術画廊では、美のエキスパートたちによる最新のアートシーンが展開されているのです。その誕生から110年以上にわたり、百貨店美術部はお客様への“美の橋渡し”という役割を担いながら今日も活動を続けています。



元永定正《いろもかたちもいろいろは》

1990（平成2）年

カンヴァス・油彩：I部



福本潮子《時空Ⅲ》

1991（平成3）年

麻：I部



福本潮子《時空Ⅳ》

1991（平成3）年

麻：I部



高波杜太郎《大阪の街》コラージュ

2010（平成22）年

ミクストメディア：I・II部



山本太郎《セタラブンツェル》

2018（平成30）年

紙本着彩：II部

【イベントのご案内】

①～③は、いずれも参加無料、要申込み、抽選制です。当館ホームページよりお申込みください。

① 講演会「高島屋美術部の物語—美術部〈勤務〉50年史—」

講師：中澤一雄氏（元高島屋美術部顧問）

日時：4月9日（日）午後1時～午後2時30分

会場：高島屋史料館多目的ルーム

定員：15名様

要申込み・抽選制

② 講演会「いままでも これからも“美”は生き方の道しるべ」

講師：津田廣行氏（高島屋美術部OB）

日時：6月11日（日）午後1時～午後2時30分

会場：高島屋史料館多目的ルーム

定員：15名様

要申込み・抽選制

③ 美術画廊への誘い

当館で本展を鑑賞後（学芸員が解説）、高島屋大阪店美術画廊へ移動し（徒歩10分）、

四代 田辺竹雲齋先生の個展会場を訪ねます。

～四代 田辺竹雲齋ギャラリートーク&作品制作パフォーマンス～（14:00～）にご参加いただけます。

日時：5月26日（金）午後1時～午後2時30分頃

会場：高島屋史料館企画展示室、大阪高島屋6階美術画廊

定員：15名様

要申込み・抽選制

④ 学芸員によるギャラリートーク ※お申込み不要、開始時間までに企画展示室にお集まりください。

日時：会期中の毎週土曜日 午後2時～（約30分）

※いずれもイベントの詳細は高島屋史料館ホームページをご覧ください。

※状況により、イベントを中止する場合がございます。

※本リリースに掲載している画像は、本リリースに関する記事掲載目的での利用に限らせて頂いており、画像改変(トリミング、部分使用、文字のせ含む)や、営利目的での使用等、(株)高島屋に許諾されていない態様での画像使用は、かたく禁じます。